

— 告 告 —



西尾 依歩紀 (にしお いぶき)

金沢工業大学大学院工学研究科
建築学専攻
博士前期課程一年
大阪府上宮高等学校出身

教師から建築家志望へ、 心震わせた金沢ひとり旅。

高校二年の夏、人生初のひとり旅に出た。いくつかの候補地から選んだ先は石川県金沢市。ただ、観光の定番である兼六園や金沢21世紀美術館などが、彼の心を騒がせることはなかった。

「文系人間で、父や祖父と同じ教師を目指していました。しかし、出格子の茶屋街と川にせり出した木組みの棧敷席、それと水面に優

美に映る提灯の明かりが目に入った時、『僕は建築家になりたかったんだ』と強烈に思いました」

それは、胸の奥に埋み火のように静かに眠っていた建築家への憧れが、城下町の風に吹かれ赤々と炎を上げた瞬間だったに違いない。翌日も、気がつけば同じ場所に何度も立っていたそうだ。振り返ると、父が設計士と相談して建てた

自宅の子ども部屋は、壁の棚が可動式になっていて遊び心が刺激された。近所にあった住宅展示場へも、ひとりよく出かけ、飽かずに眺めるといふ少年だった。

金沢の旅から帰り、担任に進路変更を告げにいくと「正気か」と驚かれた。苦手にしていた理数科目の勉強を始め、KITの特別奨学生であるスカラシップフェローにも選ばれた。そして、入学後は学内外の建築プロジェクトやコンペへ積極的に参加し、「まちやその場の特性、歴史と向き合う設計理念にひかれて」と、竹内申一教授の研究室に入った。

今年二月、卒業研究をベースに応募した全国規模の空間造形デザインコンペでは、見事、佳作賞に輝いた。故郷の大阪・泉州に多数点在する溜池の価値を見つめ直し、人間も含めた動植物の棲みかとして再生させるコミュニティの構築とプランが高く評価された。一古

いものを切り捨てながら進む未来でなく、土地が育んできた文化とともに歩む未来を描きたい。それが、理想とする僕の建築家像です。この原点にあるのは、小中高校と通ったすべての学び舎が跡形もなく取り壊され、胸に穴を空けられたような寂しさと喪失感だ。

だからだろうか。最近、帰省の折に必ず立ち寄るのが、日本一長い商店街で知られる天神橋筋商店街という。激安の衣料品店や大阪らしい雑貨店、居酒屋がひしめき、喧噪とノスタルジーが交錯する下町である。人を拒むかのような目抜き通りの超高層ビルより、一本裏に入った路地の佇まい。これから彼が挑むのは、きつと人の息づかいや体温が感じられる場をつくり出す建築物なのだろう。いつか、その現場を訪ねてみたい。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七二一
電話番号(076)248-1100

KIT
キャンパス
レポート
文・杉村裕之